

～生物多様性にあふれる港内環境を目指して～

酒田港藻場づくり会

地域の特徴

酒田市は山形県の北西部に位置しており、県内唯一の重要港湾である酒田港を有している。酒田港は重要港湾でありながら、水産物の水揚げ地としても県一の水揚げ量・金額を誇る港である。一方で、酒田港内における生物多様性の保全が課題となっている。



地域の現状

元々、山形県沿岸の大半は砂地であり、魚類の産卵場・生育場となるような藻場が少ない。数少ない藻場はワカメが優占しており、本種が枯れる夏場以降、大型海藻がほとんど見られない状況である。現状のままでは大型海藻はますます減少し、魚類の産卵場・育成場が消失することとなる。

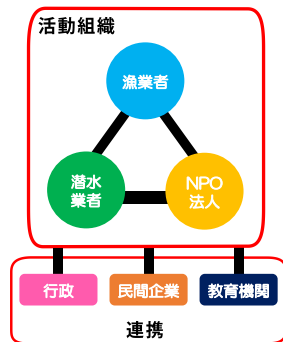


ワカメが優占している藻場

組織の設立及び活動方針

上記の経緯の下、大型海藻の維持・保全を目的とし、平成29年度に「酒田港藻場づくり会」を設立した。当会メンバーは、漁業者、ダイビングショップ、NPO法人を中心とした計23名で構成しており、活動の都度、民間企業、教育機関、行政と連携している。

当活動組織の活動方針は、魚類の産卵育成場の形成、及び生物多様性の創出である。水産資源の保全のために藻場造成として、食害生物の除去や母藻設置、モニタリングに取り組みつつ、環境学習を通して地域住民の藻場保全活動への理解を深める。



活動実績

当活動に対する理解の増進を目的に、酒田市農林水産課と連携し、「酒田市農林水産祭り&庄内森とみどりのフェスティバル」において、タッチプールを設営。タッチプールには、食害生物除去にて採集したウニ等を利用している。

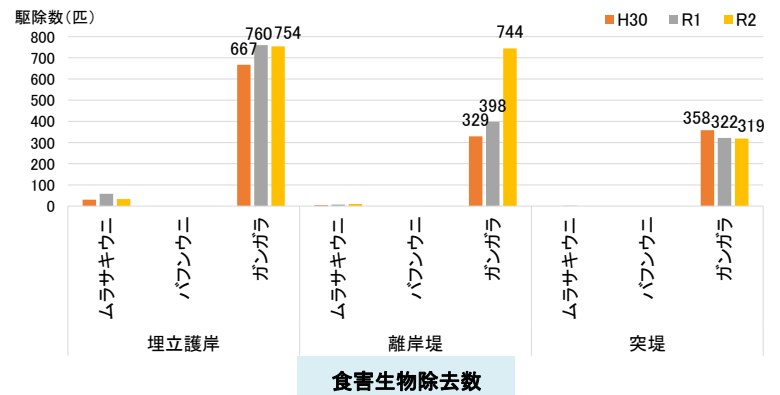


タッチプール設営

当活動組織が主体となり、酒田光陵高校、鶴岡工業専門学校との連携によって、漂着ごみの現況調査等を実施。調査に参加している生徒にとっても、海岸生態系の役割や人の生活との関わりについて考える良い機

会となっている。活動当初は、取組について理解を得ることに大苦労した。しかし、酒田市との連携により、円滑に連携体制を構築することができた。

藻場保全を目的として行っている食害生物除去は、漁業者が中心となって実施している。除去対象はコシダカガンガラ、バフンウニ、ムラサキウニである。漁業者の参加人数増加と1人当たりの技術向上により、年々駆除できる個体数が増加している。

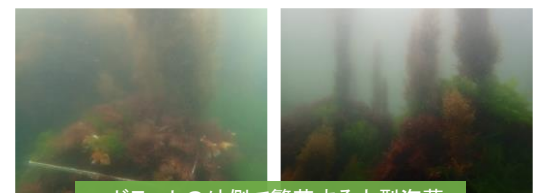


また、食害生物除去に加え、藻場形成を促進するため、母藻を設置している。設置方法は、母藻とブイをアンカーに固定して沈め、母藻が枯死・流失した後にブイとアンカーを回収している。また、港内にアミノ酸入コンクリートを設置し、海藻の成長促進を図っている。

モニタリング調査はダイビングショップが主体となり、レジャーダイバーや加茂水産高校と連携して行う。モニタリング時には、50cm×50cmのコドラートを用いて、海藻被度、ハタハタの魚卵数、食害密度を計測する。

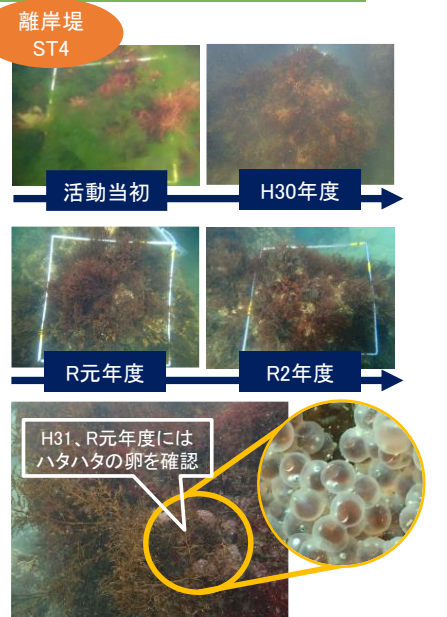
活動の効果と課題

モニタリング調査の結果、経年的な被度の増加は認められなかった。しかし、モニタリングポイント外では、アカモク、ヨレモク、ヤツマタモク等の大型海藻の繁茂が目視で確認でき、年々藻場が拡大していることを感じている。



コドラートの外側で繁茂する大型海藻

また、藻場の種構成についても、活動当初にワカメが優占していた状態から、現在では春にモク類とワカメが混在して見られるようになった。大型海藻が増加した結果、H31～R1年度には活動区内に、ハタハタの卵が確認されるなど、港内の生物多様性保全に大きな効果をもたらしている。今後は、現在増殖を図っている春成熟のアカモクに加え、冬成熟のアカモクの定着を検討している。



離岸堤 ST4

活動当初 → H30年度

R元年度 → R2年度

H31、R元年度にはハタハタの卵を確認